

# 教育相談面接における 「おしゃべり」の機能について

—過剰適応気味に成長してきた女子中学生の不登校と過剰適応との関連で—

加藤 美智子

## はじめに

最近の日本スポーツ界では、10代前半から世界を視野にいれて活躍している子どもや若者が出現している。大舞台にもおどおどすることなく、楽しそうに生き生きと活躍している姿は、大人側がオリンピックユニフォームの着方が悪いとか発言に注意なさいと苦言を呈していた時代をはるかに超えた次元にいることを実感させられる。いつの時代にも、若者は大人から未熟であると非難される立場にあるが、そろそろ大人側もその考えも改めたほうが良いのかもしれない。すべての子どもや若者がテレビに映し出される選手のようにはなれないのが現実であるが、普通の人々にも自分の持つエネルギーが本当に発揮されるときは素晴らしさを知って欲しいものである。

ところで、臨床心理士養成の大学院コースを持っている大学では、院生の学内臨床実習の場として、地域の方々に利用していただく相談センターを設置している。そして、相談は臨床訓練初心者である大学院生が担当するということを承知の上で、このようなセンターには小さな子供から70代近い方々まで、多くの利用者が来て下さる。もちろん、大学院生の臨床実践には臨床心理士資格を持つ教員が、きめ細かく指導を行いながら進めていくのであるが、これだけ多くの方々が利用されるにはそれなりの理由があるだろう。大学に対する信頼が背景にあること、料金が巷の相談施設より安いこと、地域

にあって通いやすいこと、地域内の施設との連携が可能ながまず思い浮かぶ理由である。そして、中学生と若い大学院生が行ない、筆者がスーパーヴィジョンを行なった一つの面接において新たな理由が見つかったと思われるので、その面接での事象について考えていく。

来談した女子中学生は、実母を自死で喪い、その事実を知らされないで育ち、そのような家庭の文化に過剰適応気味に適応し、とうとう不登校に陥ってしまい、スクールカウンセラーの勧めで相談センターに来ることになったと考えられた。面接者の大学院生は、修士2年の女子学生である。

## 1. 過剰適応とは

### (1) 概念として

学生相談において、心の問題を呈する学生には幼少期にいわゆる「よい子」であった子どもが多いと言われる(河合,1996)。そして田畑(1985)、杉原(2001)桑山(2003)は、不登校や心身症、非行、家庭内暴力といった問題で相談に訪れる人々の幼少期のエピソードに、この「よい子」であったことが語られることを報告している。河合(1996)は、「“よい子”とは、親や教師など大人にとって都合のよい子の略語である」とまで述べている。「よい子」の特徴として「おとなしくて手のかからない子ども」(平尾,1978)「甘えられない」(杉原,2001)「役に立つ子」(菅,2003)「大人から頼

りにされる」(堀, 2006) などが挙げられている。また、山川 (2001) は、子どもが自分自身のために自分のエネルギーを活かしている「よい子」と他者志向性が高く自己抑制が強く働いている「よい子」がいると述べ、後者の「よい子」を、他者との協調に過剰にエネルギーを使って過剰適応による不適応を生じている「よい子」として、このよい子を過剰適応と捉えている。過剰適応とは、「外的適応が過剰なため、内的適応が困難に陥っている状態 (桑山, 2003)」であり、「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応えようと努力を行うこと (石津・安保・大野, 2007)」と捉えてよいだろう。

このように過剰適応を身につけてしまう背景にはどのようなことが隠されているのだろうか。

しかし、この背景を原因と捉えてしまうと本質が見えなくなってしまうだろう。ここは、絵画の比喻で考えてみたい。思春期から青年期になって自分について考えはじめると、過剰適応の子どもは描いた絵の背景に埋もれるように主人公 (自分) が描かれていることに気づき、疑義が生じるという連想で理解できる。周囲の同級生は主人公を生き活きと描いているのに対して、自分の絵の主人公は背景に埋もれている、と違和感ある自分を感じ、孤独を経験し、生き活きと描かれている主人公の絵が並ぶ学校という場所には行きにくくなるとの理解も浮かんでくる。

しかし、このような悩みは、本人は苦しいかもしれないが、悩む力を持っていることは成長の可能性を持つともいわれることからすると、とてもよい成長の機会になっていると考えられる。過剰適応気味により子で育ってきた思春期の若者に、ほどほどに周囲に適応し、生き活きとした主人公に描けるような可能性を持っている自分を認識し、自分への関心を持ち、程よい適応による生き方に修正していくような機会を

提示することは大切であろう。

周囲の大人からは期待され、安心されてしまい、心の内側に何を思っているかが気づかれにくく、周囲との争い事を嫌い、周囲に溶け込みながら自己開示をせず、円満に過ごしているであろう彼らに、自己主張をする経験をしてもらうには何ができるのだろうか。

ちなみに、昨今の大学では卒業論文のテーマに自己開示や自己呈示を選ぶ学生が多い。この現象も、この「よい子」「過剰適応」生活と関連しているのではないかと推測される。卒論が一つの機会であるとも考えられる。

いずれにしても、思春期に経験していることが、青年期に影響し、成人期にも影響していくことは十分に予想される。成人期への影響として考えられるのは子育てである。自分の子どもが幼児期に発達的に健康な自己主張をすることに受容的に対応することが難しくなることも考えられる。子どもに合わせすぎ、気を遣いすぎる親になっていくことが心配される。このような連鎖を止めるという大きな課題を想定して過剰適応について考えていくことが必要であろう。

## (2) 二つの過剰適応研究

過剰適応の予防を考えて、よい子の2分類を弁別することを目的に行われた研究がある。柏原 (2008) は、バウムテストを用いて過剰適応の生徒の描画特徴を検討し、過剰適応傾向の高い生徒のバウムにおいて、樹冠と幹が接合しており、樹冠内枝が無く、樹皮に傷・印が描かれるといった特徴を見出した。もっとも、過剰適応尺度の問題点や、症状面など別角度からのアプローチにより過剰適応を自覚していない生徒について検討すること、バウムの全体印象を検討することなどの課題を残している。

また、富田 (2013) は、首都圏の公立中学生 588 名を対象に、身体症状尺度 (富田が独自に作成)、青年期前期用過剰適応尺度 (石津, 2006) を用いて調査を行った。まず中学生にお

ける過剰適応について、身体症状という視点も含め、その実態を明らかにし、バウムテストにおける全体印象の検討と個別事例検討から過剰適応の生徒の描画特徴を浮かび上がらせ、スクリーニングの可能性について探求している。過剰適応尺度の因子分析（主因子法、プロマックス回転）の結果、「自己抑制」、「他者配慮」、「自己不全感」、「人からよく思われたい欲求」の4因子を見出し、女子の方が男子よりも「自己抑制」と「自己不全感」が高い結果を得た。さらに、身体症状尺度については、過剰適応尺度得点の高・中・低群を要因とした分散分析を行い、過剰適応尺度得点が高い群ほど身体症状を多く生じていることを明らかにした。そして、過剰適応群と一般群のバウム画印象を比較し、過剰適応群に「激しい」「勢いのある」「濃い」というエネルギー感の高さや、「陰しい」「苦しそうな」「暗い」「恐い」「濃い」という緊張度の高さ、「奇異な」「バランスの悪い」という形態の統制の悪さが捉えられたとしている。富田(2012)は、過剰適応と身体症状の関係を見出し、投影法であるバウム画からエネルギー感やバランスに関する知見を見出した。このことは意義があると思われる。しかし、個別のバウム画の検討にまでは十分に行なえていない。

柏原(2008)、富田(2013)の研究は、意識可能レベルの質問紙法ではなく、無意識レベルを投射法という方法で捉えようとした意欲的な若い研究者らしい研究である。そして意欲にもかかわらず、バウム画の質的な理解に苦戦し、バウム画から跳ね除けられた不全感を残している。ちなみに、バウム画とは、バウムテストで描かれた木の絵を指している。バウムテストとは、A4版の白画用紙に鉛筆で「実のなる木を描く」という簡便な描画法である。Karl Kochが人格テストとして体系化したものであり、個人のパーソナリティ全体をすばやく概観できる(Bolander, 1977 高橋訳1999)優れた方法であるとされている。

しかし、バウム画だけではなく、描画という

手法を用いるには、十分なる準備と学びと経験と感性が必要である。自分の内面を投射させながらの描画は、内的エネルギーを多く使うため大変に疲れ、エネルギーがあふれ出すこともある。そのことへの対応がしっかりとなされていなければならないとされる。中学生や高校生や大学生が無意識レベルで自分を表現することができ、自分を見つめる機会として描画を用いることは有意義であると考ええる。目に見えない自分の姿を投射して目に見えるようにすることで、自分を鏡に映しているように眺めることができるからである。しかし、この描画の機会をどのような配慮の下に行なうかは、まだまだ検討されていない。描画の機会はとても大きな可能性を持つとは考えられるが、実施に向けての課題は大きいようである。

そこで、本論では、過剰適応の中学生の面接内での行動と、大学院生の面接者との間に生じた現象を取り上げながら、より具体的に過剰適応の中学生の特徴について考えてみる。

## 2. 事例

### (1) 事例の背景と面接への方針

女子中学生Aさん。小学校高学年から少しずつ不登校傾向にあり、中学1年の夏休み後から不登校になった。しかし、学校のスクールカウンセラーや養護教諭との関係を持つためには学校へも出かけることが出来た。スクールカウンセラーは、カウンセリングの必要性を感じ、大学の相談センターに紹介をしてきた。出生後まもなく、実母が自死をとげており、そのことを父親や祖母は全くなかったことのように生活をしており、当然子供たちには話していなかった。この実母のモーニングワークとAさんの不登校が関係しているというのが、スクールカウンセラーの見立てであった。大切な人を亡くしたことの悲しみに向き合うカウンセリングは大変に重要であり、スクールカウンセラーの見立てに間違いはないだろう。

しかし、悲しみに向き合うグリーフカウンセリングはカウンセリングの中でもカウンセラーの経験を要するテーマである。当然、大学院生には無理難題である。相談センターとしては、今すぐに、実母の死にまつわる事柄をカウンセリングの目的にすることは適切ではないと、受理面接会議で判断した。それは、同伴でやってきている父親の面談から、父親自身が妻の死を受け入れきれずにおり、子ども二人を育てるために懸命に生きておられる姿が垣間見られ、子どもの不登校に意気消沈し怒りをも感じていることが分かったからである。父親の面接も併行して行いながら、家族が実母の死について触れることができる機会を待つことが妥当ではないかとの判断をしたのである。これには、実母の死から10年以上も月日が過ぎており、固い家族の掟が出来上がっていることも考慮されている。いわゆる悲しめない悲嘆となっているのである。

ところで、Aさんはいわゆる内弁慶であり、祖母にはかなりの暴言があり、姉妹との喧嘩もあるということであった。また、いろいろなことを決めるのはほとんどが父親と祖母であり、家の決定事項には子どもたちが参加しない雰囲気があった。自分の要望を表明することはなく、わがままと受けとられる行動になることがあるだけであった。学校の教師の評価としては自主性がなく、気遣いが激しく、完璧を求めるところがあり、勉強は出来ないわけではないが欠席が多いため授業内容の理解が薄くなっており、そうするとますます授業に出られなくなったというものであった。反面、他者の言うことには耳を傾けず、「はい」と返事はするが実行力が伴わないという。

このような情報と大学院生が面接を担当するということから、当面の面接目標は、自由に楽しく過ごすことができ、思っていることを他者に話すことが出来るようになることとした。

## (2) 面接経過に見られた外面的な特徴

### 1) 服装における特徴

初回のAさんの服装は、Aさんを知る上で大変象徴的であった。彼女は薄化粧をしているようであり、ピアスもしていた。襟もとが大きくあいた大人びたTシャツにカーディガンとショートパンツであった。中学1年生としては大学院生の面接者も驚くほど大人びていた。しかし、その服装に合わせて履いているソックスは、幼い子どもが大好きなキャラクターの絵が描かれたものであった。カーディガンの下のTシャツの胸にも人気のキャラクターが描かれていた。

現代の中学生は休日などには化粧もしてアクセサリーもつける。また、キャラクターものの小物やバックなども持つ。そこには統一されたファッションセンスがあることが多い。しかし、Aさんの服装は、若い大学院生にも感じられるほどの違和感のあるバランスであった。このAさんの大人びた部分と子どもの部分をどのように受け取っていくかが面接の課題となった。

### 2) 面接方法の特徴

中学生以上の面接は、大人も使用する面接室で行うこともあるが、プレイルームを使うこともある。遊びながら話をすることが、緊張をほぐす場合もあるからである。Aさんと大学院生は、遊びとしてバトミントンや卓球、ジェンガ、パズルを選択しながら面接を進めていった。

面接者の大学院生は初めての面接経験であり緊張が強かったため、Aさんが遊びを選んでもくれたことが有難かったという。ここにAさんの相手にたいする感受性、気遣い、が介在していた可能性を見逃すわけにはいかない。一方Aさん自身も遊びが必要であったことも推測に難くない。Aさんは、他者と向き合って話をすることの準備が育っておらず、遊びを取り入れながら話をしていくことがよいと見立てられた。なお、面接の場所、面接時に行う内容の選択は、Aさんに任せていた（自発性の促しとして位置

づけた対応であった)。

Aさんは、遊びながら、目立たないように(つまり、大学院生が気づかないように)大切な話をしていった。大学院生は、その話の重要性には気づいていなかったが、面接の基本として、来談者の話は繰り返しをはさみながら安易に質問をしたり、話題を変えたりしないようにはしていた。そして、面接後のスーパーヴィジョンで、上記のような見立てを話し合い、少しずつAさんに気づいていった。

パズルでの遊びにも、Aさんらしさが見られた。幼い子どもが喜ぶ絵柄のパズルを選択し、中学生として難易度が高くない500ピースのものであったにもかかわらず、行き当たりばったりで進める傾向がありなかなか捗らなかった。院生は少々イライラして自分が進めてしまうこともあった。

しかし、次第に、このAさんのペースに周囲の大人は待ち切れずに手を出してしまい、Aさんの自主性を奪ってしまっていたのではないかと、の可能性に気づき、Aさんのやり方とペースでパズルの完成を目指すことにした。かなりの回数をかけて、本当に少しずつ少しずつ完成に向けて進んだが、次第にAさんが大学院生に、「このピースはこの場所じゃないですか」などと話しかけてくるようになった。Aさんのゆっくりしたパズルへの取り組み方は、どこまで自分のペースを待ってくれるのかを試していたようにも考えられた。

また、このAさんのゆっくりパズル作成計画には、無意識か意識かわからないが、パズルが完成したあとの面接の仕方がわからないので引き延ばす目的があったようにも考えられた。現に、大学院生もパズルが完成間近になると「次はどうしよう」と不安を感じるようになっていた。ここにもAさんの他者情動感知センサーが働いていた可能性も感じられる。また、Aさん自身も次の面接段階にどのように進んで良いのかわからなかったのかも知れない。Aさんと面接者である大学院生の共振があるように思え

る。

そして、次第に丁寧語での話し方に少しずつため口が入るようになっていった。そして、大学院生のイライラも次第に落ち着いていき、なんとなく二人の空気は和らぎ、笑いや愚痴が混じるような時間になっていった。また、Aさんが、学校の先生のことや父親のことや友達のことなど日常の話題を話すようになっていった。

### 3) 話の内容における特徴

1年ほどの面接が継続された。はじめの数回が終えた頃には、Aさんが来なくなるのではないかと不安もあったが、Aさんは通い続けた。キャンセルや遅刻もほとんどなかった。長い時間が経過すると、特別支援学校への転校も話題になり始めた。これらの話題は、いずれも学校側から提示され、親が呼び出されて説得されて、学級見学や学校見学をする運びとなっていた。Aさんは、大人の考えに従って見学をしたあと、必ず、「うん、良かったよ」「思っていたより時間がかからないで通えそう」などとまず利点について話し、その後「でも、今の学校のほうが友達いるから・・・」「今の学級のほうが慣れているから・・・」などと否定的な側面を付け加えた。そして、なかなか結論を出さずに引き延ばしていた。父親とも少しは話をしていようであるが、やはり、父親には自分の考えを伝えるくいようではあった。しかし、父親も面接を継続しており、Aさん本人の意向をなるべく重視するようにと指導を受けていたので、強引に結論を出すことはしないでした。

また、Aさんの話を聴いていると、「朝遅刻しないで行こうと思うんですけど」「もっと勉強して点数とるつもりです」「前の夜は早起きしようと思って」などと、いつも未来形の話であり理想の話であった。自分の気持ちで「こうしたい」という言葉遣いにはならなかった。今をきちんと見るのではなく、出来ない現実を見ないで、観念で出来るようにならなければと考



えていたように思われる。あるいは、出来るべきであると自分をバッシングしているようであった。

#### 4) 描画導入の試み

Aさんは、徐々に小さな変化を示していたが、面接者の大学院生には、Aさんがどんな人であるのか、内面的に本当に話すべき話をしているのかなど、面接が良い方向に展開しているのか不安になってきた。ただ、おしゃべりと遊びをしているだけで、これではカウンセリングとしてダメなのではないかとも考えていた。

そこで、内面を捉えるために心理テストをしたいと初めて大学院生の自主的な考えを出してきた。この自主性をどうにか実現しようとスーパーヴァイザーとしては考えていた。そして、面接が進んでからの心理テストの意味を考え、描画を施行することにしたが、大学院生はまだバウムテストを導入する心の準備ができていなかった。そこで、高校進学などの問題に向かい始めていた時期でもあったため、被験者の未来に向けての見通しが表れやすいと言われる風景構成法を用いることにした。

Aさんの風景画は、ふんわりとした田園風景を思わせるものであったが、自然と人間生活が繋がっていない印象を与えるものであった。部分的な描写に不健康さを感じることはなかったが、道は途中で切れており、自分の将来についても分からない状況であることが推測された。

大学院生には、スーパーヴィジョンでこの風景画を使ってたくさん話をするようにアドバイスしてあった。しかし、大学院生もAさんも、風景画について話をたくさんすることは出来なかった。Aさんは、大学院生の風景画についての感想をさりとした態度で聞いていたようであるが、話題をつなげることはなかったという。描画導入の効果についても判然としないうまになったが、面接は継続した。

### 3. 考察

#### (1) Aさんの過剰適応について

Aさんの事前の情報と面接経過に見られた特徴を総合的に考えると、過剰適応研究でしめされた、「自己抑制」「他者配慮」「自己不全感」「人からよく思われたい欲求」の傾向はあるように思われた。他者配慮というよりは他者を敏感に感じ、他者に合わせた行動をとる傾向が見えた。身体的症状は強くは出ていなかったが、過剰適応気味な中学生であるとの捉え方は間違っていないように考えられた。

実母のグリーフは、Aさんの根底に流れる大きな問題であることは想像されるが、グリーフに対する治療としてのカウンセリングを考えるよりは、そのような問題を持ったために家庭の風土に過剰適応してきたことを重視し、他者に対して過剰に敏感になって他者を優先して配慮をすることや、その結果として自己抑制を働かせるため自己表明をしないでいること、不登校という行動によって自己不全感を持っているだろうことに注目して、Aさんが少しでも自主性を発揮して、過剰適応傾向を修正していくことをカウンセリングの目標にしたことは、思春期の人たちへの対応として適切であったと思われる。

#### (2) 大学院生が行う面接の良さ

なぜ、Aさんの面接は継続していたのか。そこには、大学院生が面接の初心者であったこと、大学院生の臨床心理士訓練生としての自覚と誠実さがあったこと、Aさんとの時間を一緒に楽しく過ごせるように努めたこと、Aさんから出てくる遊びやおしゃべりを邪魔しないこと、の4点に大きな理由があったと考えられる。大学院生が面接することには、積極的で肯定的な意味があるということである。

臨床経験のある面接者が面談すると、もっと早くに治療的にAさんに変化をもたらしたかもしれない。しかし、Aさんは治療を必要とする

状態だったのだろうか。山登（2014）は、精神科医として「思春期の年代には、病気の輪郭が曖昧なケースが少なくない。また、慌てて白黒をつけるよりもグレーはグレーのまま経過を見たほうが、のちに本人に利益をもたらす場合もある」としている。今回の事例のAさんは、悲しい出来事があったがために、経験として他者と関わることが圧倒的に少なく、経験不足からくる不適応が習慣になっていたと考えられる側面がある。Aさんにとっては、治療というよりは発達の不足を補うという姿勢、そして本人の分からないグレーの内面をそのまま侵入しないグレーのままで対応する姿勢が必要であったのではないだろうか。家族ではない少し年上の大学院生との時間の持つ意味は大きかったと考える。思春期の女子には、同年代とのおしゃべりの時間がとても大切である。しかし、その前に、親とのおしゃべりが経験されていることが基盤になっていないといけないう。おしゃべりの楽しさや充実感が自分を表現することの下地となるのである。そして、他人であり少し専門知識のある大学院生とのおしゃべりは、同年代や家族との中間人とおしゃべりと捉えられ、保護的な雰囲気でおしゃべりができ、肯定的なおしゃべり体験を増やしたと考えられるのである。

松本（2012）は、中高生向けに書かれた「メンタル系サバイバルガイド」という特集のなかで、一番の自分を傷つけている行為は他者に「相談しないこと」であり、信頼できる大人ばかりではないけれど、「信頼できる大人は必ずいる」ということを、中高生に訴えている。筆者はこれに加えて、「相談する前に、信頼できそうな大人とおしゃべりをする時間を探そう。それも、ネット上ではなくて現実のなかで」と言いたいと思う。そういう場所の一つとして、経験はまだ浅くて、たいそう心もとない大学院生の臨床実習としての面接にも大きな意味を持たせることが出来る。

一方、臨床心理士コースの大学院生は少し勉

強をすると、自分が臨床の専門家であると傲慢になり、自身の不安を感じながらも否認し、専門家のつもりで行動したがりがちである。この事への戒めとしても、中高生の大切な経験を積む相手としても、少し年上の頼りないけれど魅力のある兄弟姉妹のように、おしゃべりや遊びを楽しみ、世の中のさまざまな事象について語る時間を持ってほしい。成長することにこのような時間は大切であること、そのおしゃべりや遊びの中にこそひそかに隠れている心の大切なメッセージへの感度を上げていくことが大切であることを、大学院生には伝えたいものである。

大学という環境に守られながら、専門の教員に守られながら、自分のキャリアを磨く訓練の一步に、このような「おしゃべりと遊び」の時間を上手に取り入れることは、利用者にとっても大学院生にとっても本当に貴重な経験となることの一例を、Aさんと大学院生との面接で示されたように思う。

### （3）描画とおしゃべり

風景構成法もバウムテストも、心理テストとして開発されてきており、投映法テストとして理解されている。しかし、岸本（2006, 2015）は、バウム画を臨床面接に活用することを提唱しており、面接の促進や面接の変わり目としてバウム画が機能するという。また、加藤（2010）は、話を「実感を伴った言葉」で話していないと、「＜私＞が感じられなくて（面接者が）困ってしまう」ことを取り上げ、バウム画を描くことでバウムを視覚的に確かめながら「実感を伴った言葉」で語るの一助した事例を述べている。

上述したAさんの事例では、面接者が初心者の大学院生であり描画の経験がないために、実際の面接でどのように描画を取り入れたらよいのかが実感として分からず緊張してしまった。

また、バウム画を取り入れることに勇気がないと言い風景構成法だと取り入れられそうだと

予感していた。そこで風景構成法を取り入れてAさんの有り様を感じ取ろうとしたのであるが、描画を書き終えたあとに、描画をはさんでおしゃべりをするのが出来なかった。数回後の面接までに風景構成法から読み取れることをまとめ、どのようにAさんに伝えるかをシミュレーションして面接に臨んだが、おそらく肩に力が入った説明や態度になっていたと予想される。

また、Aさん自身も自分を少し客観的に眺めて自分の心を感じ取る作業をすることに抵抗があり、風景構成法を媒介としたおしゃべりに乗ってこなかったと考えられる。このことは、投映法である描画を面接で用いるための重要な点を示していると思われる。描画は、ただ描いてもらえば良いものでもなく、ただ描いて解釈すればよいものでもなく、描画を媒介に、そこに投影されているであろう描き手の姿を感じ取り、話し合うためのおしゃべりがあってこそ、初めて描画の意味が発揮されるのである。

また、初心者にとってなぜかバウム画よりも風景構成法の方が扱い易いという印象を持つということも大切であろう。バウム画は、その人の生きる姿が木の姿に象徴的に現れるとも言われる。自分の生きる姿を白紙の画用紙に投影して目に見える形になることは、不安や恐れや緊張を生むものであり、時には描き手に対して心的な侵入になる場合もあるとの知識から、初心者はバウム画を取り入れることに抵抗感が生じ、その抵抗感によって面接を守っていると考えられる。

一方、風景構成法は10個のアイテムを順番に描きこんでいき最終的に一枚の風景に仕上げるという描画法であるが、風景が持つ穏やかさや包まれ感を多くの人は自然の中から感じ取っており、そこに現れる自分も風景によって緩和されるような印象があるのではないかと筆者は考えている。

結局Aさんと大学院生が、風景構成法をさらに扱ったことは、二人の抵抗であったと理解

ができる。二人にとって描画を取り入れる時期が早すぎたと言えよう。しかし、描画を用いたことで、自分に向き合うことの抵抗が表面化したことを知ることができた。そして、描画という存在を知ることができた。描画を使って自分を鏡に映したいと思い始めたときに描画という方法を知っているかどうかは大きな違いがあるであろう。つまり、面接で生じた描画に対する抵抗は実に重要であると考えられるのである。

抵抗が生じたことを把握し、そこで生じた抵抗の意味について考えることが必要である。

## おわりに

本論では、実母の不幸な死によって家族内に作られた風土に適応し、思春期を迎える時期になって自分のアイデンティティが課題になり、おそらく母親のことを知らないと自分を作れないとの危機感が生じ、不登校という行動を示したと思われる中学生のAさんを、過剰適応という視点から理解することを試みた。そして、過剰適応によって失われたであろう健康な自己主張や自主性を育むために、心理臨床の初心者である大学院生の面接が役立ったことを考察した。

成長途上にある二人で、同じ時間を同じ空間で過ごしながら未体験の体験をすることが、中学生のAさんにとって大きな経験になったと推測された。学校は不登校になっても面接は継続し続けた事実は大きな意味を呈しているだろう。

Aさんが本当は何を体験したのかは、まだAさんによって語られていない。その為、確かなことは分からないが、二人の若者だからこそ、自然な成長につながる関わりができたのではないだろうか。結果、ほんの少しAさんの自主性に変化が見られたのである。

その面接のほとんどは「おしゃべり」であり、遊びであったことから、「おしゃべり」と遊びが果たす重要な機能について考えることができ



た。「おしゃべり」と「遊び」の中にAさんは自己表現していたのであった。おしゃべりの中の自己表現をいかに感受していくかが心理臨床の大きな課題であろう。

さらに、描画を用いるときにも「おしゃべり」が重要であることが再認識された。自分自身の感情に正直になり、無理をしない態度であるならば、初心者であっても描画に取り組むことができるかと理解された。その無理加減の指標が「おしゃべり」であった。「おしゃべり」の重要な機能を実感した。描画の扱い方において重要な視点が提示されたと考える。

過剰適応を余儀なくされたと思われる中学生（高校生や大学生も同じであろうが）に、無理強いしない「おしゃべり」と無理強いしない「描画」を用いた心理教育的な方法についても今後は考えていきたい。

- 岸本寛史（2015）バウムテスト入門 臨床に活かす「木の絵」の読み方 誠信書房
- 松本俊彦（2012）問題に「気づき」「かかわり」そして「つなぐ」 松本俊彦編 中高生のためのメンタル系サバイバルガイド こころの科学 日本評論社 2-7
- 富田圭美（2013）過剰適応のスクリーニングテスト開発に向けた基礎的研究—バウムテストにおける描画特徴の検討— 大妻女子大学生活文化研究 No23 131-132
- 山川法子（2001）いわゆる「よい子」の特徴および「よい子」を作り出す規定に関する考察 名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要 48（1） 47-55
- 山登敬之（2014）思春期の「悩み」とこころの「病気」 こころの科学 No175 10-13 日本評論社

## 【引用・参考文献】

- 平尾美生子（1978）学校に背を向ける子 児童心理 32（3） 41-46
- 堀 恵子（2006）過剰適応の背景にある対象関係 精神分析研究 50（2） 135-142
- 石津憲一郎・安保英勇・大野陽子（2007）過剰適応研究の動向と課題—学校場面における子どもの過剰適応 学校心理学研究 7（1） 47-54
- 柏原博子（2008）過剰適応の子どもにおける研究—投影法のスクリーニング可能性 首都大学東京東京都立大学心理学研究 18, 29-35.
- 加藤美智子（2010）バウムテストの実践—学生相談：＜私＞を受け取る助けとしてのバウム 臨床心理学 10巻5号 692-695
- 河合 温（1994）大人によい印象を与えようとする子ども 児童心理 50（1） 110-114
- 岸本寛史（2006）NBMと描画 臨床描画研究 21 44-58